

フランスにおけるもうひとつの政治哲学の復権のモメント

—C.ルフォールの1970年代の「転回」の視座から—

和田昌也

I - 1. 「政治哲学の復権」とは何であったか

「政治哲学の復権 recovery of the political philosophy」と言えば、人はL. シュトラウスあるいはJ. ロールズ以降の思想潮流を想起するだろう。1950年代から60年代にかけて、「分析哲学と行動科学の挟撃」にあつて、「政治哲学」の没落や死滅が、T.D. ウォルドン、A. コバン、J.P. プラムナッツ、I. バーリンら多くの論者によって説かれていた [藤原 2007 : 252-253]。しかし、シュトラウスは、1956年、論文「政治哲学とは何か」において、そのような「政治哲学の腐敗」を慨嘆しつつ、なおも「善き生活と善き社会についての知識の獲得」[シュトラウス 2014 : 2] としての政治哲学の必要性を強く訴えた。それから十余年、今度はロールズが『正義論』において、古典的な社会契約論へ回帰しつつも、「功利主義に取って代わるべき」もの、「デモクラシーの社会の道徳的基礎として最もふさわしいもの」[ロールズ 2010 : xxii] として、正義の原理を定式化した。このようにして、「新たな規範理論が自由主義社会の根底を問い直しつつ新たに出現」[藤原、前掲書、252] ¹したのであった。

この「政治哲学の復権」はしかし、衰退の一途を辿っていた政治哲学内部における理論的反省から純粋に出発したわけではなかった。この復権の動きにいち早く着目したB. マギーは、それを可能にした主たる要因として、当時のアメリカの社会的政治的背景を指摘している。「哲学と政治」と題して行われたD. ドゥオーキンへのインタビューのなかで、マギーは「戦後二十-三十年間というもの、西欧民主主義圏にはなにか自由についての合意のようなものができて」いたが、それへの懐疑が保守、リベラルの両側から「60年代の半ばには表面化し始めた」[マギー 1983 : 280] ²と述べている。保守は性や文化の過度な多様化のみならず、犯罪の蔓延をもみせる社会のいわばアノミー対して「伝統的な規律」を課す重要

性を説き、またリベラルの側は、ヴェトナム反戦運動の高まりを受けつつ、貧富の格差の解消や富の再分配を訴え、また人種、性の抑圧を批判した [同上]。

このように、理論と実践の両面から生み出された「政治哲学の復権」とは、結局、具体的に何を指すものであろうか。ここで保守の代表格としてシュトラウスを、リベラルのそれとしてロールズを挙げることができようが、立場こそ違えども、「シュトラウスもロールズもともに自由主義者であり、むしろ危機における自由主義に新たな哲学的基礎を提供しようという意図において共通」[藤原、前掲書、319] していたのであった。この点において、「政治哲学の復権」は、「人間の共同生活が価値あるものとなるような」[Pogge 2007: 26] 公正な社会の構想であれ、あるいは「善い政治秩序」[シュトラウス、前掲書、4] の探求であれ、従来の自由民主主義体制を正当化してきた理論と実践への反省にたち、なおも個人の自由を確保し得る理想的社会像とそれに関する規範を提示することで、時代の危機を乗り越えんとする自由主義的ムーブメントであったと言えるだろう。

I - 2. フランスにおけるもうひとつの「政治哲学の復権」？

本稿は、同時代に起こったもうひとつの政治哲学の復権に焦点を当てる。上述したものをアメリカ型とするならば、ここではフランス型の「政治哲学の復権」のムーブメントに着目したい。

では、フランス型の「政治哲学の復権」とは何を指すのか。すでにこの点に関しては、2000年代初頭に顕著となった動向が注目されている [宇野、2003]。それは、宇野によれば、L. フェリー、A. ルノーをはじめとした多くの代表的な政治哲学の論者が「現代世界において次第に優越的な地位を獲得しつつある英米の諸制度とイデオロギーに対する受容と対抗」[同上、42]³を試みるものであった。この動きを、別の論者に倣って、「リベラリズムに関する政治哲学の復権」[Lilla 1994: 7]⁴と呼ぶこともできよう。しかし、他方で、フランスにおける政治哲学の「新保守主義的な用法 usages néo-conservateurs」[Corcuff 2000] の回帰を批判する政治哲学の潮流も存在している [Rancière 1990; idem., 1995; Badiou 1998; Abensour 1994]。彼らの特徴は、とはいえ、政治哲学を拒否するところにあるわけではない。むしろ、「古典的政治哲学」、とりわけその「リベラリズムとは異なる観点」[Abensour 1994: 61] において政治を考察する学としての政治哲学を彼らは模索している。したがって、G. レベルとD. タンゲイがK.O. アーペルの著名な言に倣って表したように、彼らは「政治哲学に抗して政治哲学とともに考えること penser avec la philosophie politique contre la philosophie politique」[Labelle et Tanguay 2003: 7] を実践しており、そのような彼らの政治哲学内部における「居

心地の悪さ *malaise*」は翻って、「アングロ・サクソンのパラダイムが認めない論争をより根源的でより豊饒な仕方で開催」[*ibid.*] することを可能にさえしている。

ここでは、上記のようなりベラリズムの受容と対抗を軸とした政治哲学の復権の動きとそれへの対抗の時代からさかのぼり、別の文脈において、まったく別の企図をもって為されたフランスにおける政治哲学の復権に焦点を当てることとする。戦後フランスの政治思想史を見渡せば、70年代が一つの画期を為すといえるからである⁵。その企てが対峙した問題とは、功利主義でもリベラリズムでもなく、「全体主義」[*ibid.*, 4] であり、その理論的課題とは、ロールズやシュトラウスが志向した「よく秩序だった社会 *well-ordered society*」の規範の提示ではなく、「政治的なもの *the political/le politique*」を発見することであった⁶。私見によれば、この種の政治哲学の復権の企てが、2000年代に顕著となったフランス政治哲学の復権内部の対抗勢力として引き継がれているのであり、この考察はその系譜を理解するうえでの準備作業としても必要と考えられる。

本稿は「70年代の反全体主義的転回 *anti-totalitarian turn*」[Sawyer and Stewar 2016: 9]⁷ と称すべきその動きのなかに、フランス型の政治哲学の復権の端緒を捉えることを目的とする。特に、第一に、上述してきたリベラリズムの復権としてのフランスの政治哲学の興隆とは異なる種の政治哲学の先導者としてC. ルフォールを捉えること、そして第二に、その企ての時期を1971年のルフォールとM. ゴーシェの共著論文に見定めることを主たる目的として据える。具体的にはまず、ルフォールの全体主義論の変遷、その力点の移行を辿る。次に、ルフォールとゴーシェのその共著論文をその転換点に位置付け、そこで彼らの要請する「新しい政治哲学」がいかなるものであるのか、その課題と特徴を浮かび上がらせた。最後に、以上のことを通じて、1970年代初頭のフランス型の政治哲学の復権に先鞭をつけたルフォールの政治哲学の固有性を指摘するとともに近年の政治哲学論争との諸関係を明らかにし、むすびとしたい。

II - 1. ルフォールの転回？—官僚制批判から民主主義論としての全体主義批判へ—

ルフォールの全体主義との対峙は、盟友C. カストリアディスと結成した「社会主義か野蛮か *Socialisme ou barbarie*」時代の1940年代末に遡ることができるのだが、M. アバンスールによれば、ルフォールの全体主義批判には、大別して二つの時代が存在している [Abensour 1993]。

第一期は、「スターリンなき全体主義」（1956年）に代表され、「トロツキーの矛盾と革命の問題」（1948年）から「官僚制とは何か」（1960年）にかけてあら

わされてきた一連の著作群である。

それに対し、第二期は、全体主義自体が主題となったものは限られてくるものの、『余分な人間』（1976年）や『民主主義の発明』（1981）に収められた諸論稿が該当する。

まず、第一期の特徴としてアバンスールが捉えるのが、「反官僚制的マルクス主義」[ibid., 88]に基づく全体主義批判である。具体的にいえば、三つの点から全体主義を批判するものである。第一に、「政治的、経済的、社会的、法的、文化的等々のあらゆる機能をひとつの権威に集中させること」、第二に、「指導部の管理下における支配というモデルをあらゆる活動に押し付けること」、第三に、「あらゆる対立の形態の物理的排除による、諸個人と諸集団の操作」、この三点を第一期のルフォールは批判しようとしているのである [ibid., 90-91]。実際、ルフォールは次のように述べている。ソ連の「官僚制は国家権力および生産手段の全体を手にしてきた国家-党に集団的かつ堅固に従属することによってその力を得て」おり、「この官僚階級は硬固で安定」する一方で、「農民やプロレタリアートといった住民の大多数を犠牲にする支配と搾取の新たな様式が樹立」[ルフォール 2017: 136] されていた、と。これらの事態を招いているものこそ、ルフォールにとってとりまおさず、「官僚制としての全体主義」であり、その中心たる「党」であった。ルフォールが、したがって、第一期に目指していたものは、社会内部の対立を無化し、労働運動を指導しようとする官僚組織としての党からのプロレタリアの解放であった。「革命志向の活動家にふさわしい組織は必ずや柔軟なものである。すなわち、そのような組織は首脳部が活動家のネットワークを指導するような大政党ではない。[中略] 労働運動は、自由に自らの活動を組織する活動家たちのいくつもの組織における活動の在り方を模索するために、党の神話と手を切ることによってのみひとつの革命の道を邁進することができるだろう」[Lefort 1958 [1979] : 112-113]。

しかし、一つの階級を革命の主体とし、それを一つの歴史の相のもとで捉えようとするこの方向性は頓挫することになる。後年ルフォール自身が述懐しているとおり、このような、彼の考える「マルクス自身のマルクス主義」、「私にとっての真正なマルクス主義」、すなわち「プロレタリアートこそ<歴史>の特権的担い手」であり、「プロレタリアートから官僚制が切り離されて対峙するという経験がプロレタリアート自身によって成し遂げられること」を希求して止まないこの視座は、「行きづま」[ルフォール 前掲書: 137] ることになる。その主たる要因としてルフォールが挙げているものが、マルクスの思想内部の両義性、その矛盾の発見によるものである。マルクス主義における下部構造決定論、すなわち「生産力の発展によって規定された不可抗力の運動」が「ある生産様式から別の生産

様式へと移行を促す」といった歴史の観念は、ルフォールによれば、マルクスにおける「前資本主義的生産様式と近代資本主義の切断という観念と対立」[同上、139] するものであるが、これは、マルクスの「社会生活およびその進歩の物質的基礎だけしか知ろうとしない解釈」と「社会的な想像物の重みそのもの、つまり現在にとり憑く亡霊の役割やフェティシズムの役割を発見するような解釈」[同上] の間の相反する傾向に起因する。つまり、マルクスが歴史を「連続性」と「非連続性」の二つの矛盾した相のもとで捉えていることをルフォールは強く認識するようになったのである。そのように、ルフォールをこの時期魅了していた「社会的現実および<歴史>の本質が絶対的に決定されているという理念に対して、マルクスの思想に固有の未決定性やマルクスの言明をあらゆる一義的な決定から免れさせるような動きを発見」したことで、結果として、マルクスに「完全に同意することも、あるいはまたその理論に安住すること」[同上] もなくなるのは時間の問題となっていた。全体主義批判の視座としても全体主義への抵抗の思想としてもマルクス主義はルフォールにとって次第に失効していったのであった。

したがって、以上のようなマルクス主義の図式を払拭し、新たに全体主義の批判、その「企てに対する抵抗」[同上、145] の場を闡明する視座を確立する必要があるルフォールにはあった。そこで彼が持ち出すものが「民主主義」の否定によって出来る全体主義という解釈枠組みなのである。第二期の全体主義論は、アバンスールによれば、ルフォールの「いかに comment」への着目 [Abensour, 1993: 98] によって特徴づけられる。具体的には、全体主義が敵を絶えず生み出し、「一なる人民 *peuple-Un*」の構築を可能にしたそのメカニズムを「政治的なものの消失」として捉えていくことが主題となるのである。と同時に、本稿において重要なことに、その批判の視座が、民主主義論としての「新たな政治哲学」の課題としても据えられていく。いずれにせよ、その中心的な鍵となるのが、アバンスールが指摘するように、「社会的なものという原初的分割」[ibid., 101] の発見である。次節において、それを検討することとしよう。

II - 2. 政治的なものの発見—新しい政治哲学の課題—

1971年、ルフォールは、1965年より講義を担当していたカーン大学の学生 M. ゴーシェと共著論文を発表する。それが「民主主義について：政治的なものと社会的なものの制度 (*Sur la démocratie: le politique et l'institution du social*)」である。その論文が掲載された『テクスチュール』の「政治的なものについて *Du politique*」の巻頭の辞において、「新たな政治哲学の基礎を築く *jeter les fondements d'une nouvelle philosophie politique*」[Non signé 1971: 4]⁸ と宣言

されているのだが、いったいいかなる「政治哲学」の復権が謳われているのであろうか。浩瀚で晦渋なこの論文のすべてを子細にわたり検討するのではなく、通底する主題を追うことで、いかなる政治哲学の復権の要請がそこに見出されるかを明らかにしたい。その理論的課題とは、ルフォールの「決定的概念 concept crucial」[Mouchard 2007: 23]⁹と目されている「原初的分割 division originaire を見出すこと」[Lefort et Gauchet 1971: 11]となろう。

なぜ、それが課題となるのか。まずは、この「原初的分割」を理解するうえで重要となる、彼らの問題意識をおさえておきたい。彼らはもはや共産党やその官僚制の問題としてではなく、「原初的分割」を否定するところに成立するものとして全体主義を捉えようとするのである。「近代全体主義国家という構築物」は、彼らに対し、「政治的なものの謎の核心部に社会体の分割と抗争を還元不可能なものともみならずかどうかの決定 Décision」[ibid., 10]（強調著者）を別決するという課題をもたらしたのである。ルフォールとゴーシェは、全体主義の分析を通じて、それによって撤廃された「原初的分割」の成否を握るその「決定」、分岐点といってもいいであろうそのメカニズムを探ることに狙いを定めていく。具体的には、「全体 Totalité、プロレタリアによる権力奪取という具体的普遍 Universel concret の構築、分割の否定が共通の関係を築く」ような、「あらゆる裂け目を免れている共同体の神話」[ibid.]を彼らは告発しようとしているのである。

この問題意識に立てば、同時に、ゴーシェとルフォールにとって、次のことも重要となってくる。そのような裂け目、抗争を糊塗するような民主主義もまた、彼らにとっては峻拒すべきなのである。すなわち、「民主主義を善き体制に仕立て上げること、全体主義を悪しき体制として拒否すること」が必要なのではなく、「善き体制というフィクション」、すなわち、「それらの目的と調和のとれた社会」[ibid., 11]というその幻想を退けること、このこともまた肝要となるのである。

ルフォールとゴーシェはそこから、次のように喝破する。

われわれは、したがって、そのような（調和のとれた—補足筆者）社会を自称するような社会、あるいはそうなるうとしている社会の只中に、搾取、階級対立、権力の保持者から実行者の大多数までの隔たりを偽ったり、隠蔽したりする形態でのその回帰を告発しなければならない。われわれは、この善き体制を打ち立てたいという欲望についての幻想の影響力を浮かび上がらさなければならないのである。しかし、われわれは他方で、民主主義の分析を通じて、反対にその投錨点をとらえながら、同様の真理を再び見出さなければならないのである [ibid.]。

このように、彼らは、全体主義のなかに「原初的分割」の否定を看取するとともに、その分割に頓着しない「善き民主主義」、その目的に準じた調和的民主主義をも否定しようとしている。そして、ルフォールとゴーシェの終極的目的が、「原初的分割」が存する民主主義の理論の確立に存することが明確に謳われているのである。

ルフォールとゴーシェにとって次に重要となるのは、「原初的分割」を覆い隠すものとそのメカニズムを具体的に剔抉することである。「原初的分割」と題された当論文の第二節において、ルフォールとゴーシェは、原初的分割を隠蔽する試みの批判的考察を展開するのだが、そこでは大別して、二つの問題を指摘している。第一に、政治社会への決定論的な見方である。そこで批判の俎上にのせられるのが、ソ連の全体主義へと結実していったマルクス主義である。彼らによれば、「さまざまな生産様式の資本主義への継承というマルクス主義の理論は、社会的なものにおける開かれた抗争の還元不可能性と、社会的なものを貫く断絶についての誤認に基づいている」[ibid.]。というのも、「おそらく、マルクスが著作においてわれわれに示している術語の緊密な連鎖、すなわち、資本と労働の分離から生産手段の専有、専有から搾取、階級闘争、そして政治的支配による搾取階級の自らの地位の最終的な確保というその連関は、労働をめぐる人間の歴史の分節化を、比類なき新しさという強みをもって、明らかにしている」が、「そのような決定の連鎖における、人間の敵対的な極への結集、支配と不服従の駆け引き、法的権威の独占は、厳密に言えば、それらにとって非本質的で、それらに対し先行し、それらを二次的なものとして現す基礎」[ibid., 11-12]、いわば下部構造に基づけられてしまうからである。このように、ルフォールとゴーシェは、マルクス主義が、支配それ自体の考察を欠き、結果的にそれを巡る闘争へと向かわず、むしろ、「政治的なもの」を閑却する一種の決定論に陥ってしまうことを批判している。

第二にルフォールとゴーシェが批判するものは、「伝統的リベラリズム」[Rosenblum 2016: 72] が依拠する、共同体の存立を「起源」の想定によって説明しようとする契約論的幻想である。彼らにとって認識すべきは、「権力と政治の出現は、古典的思想にとって、[中略] 多数を占める弱者に対する一握りの強者の後見的地位 tutelle の最終的な確立か、議会の合理的なコンセンサスによる、「国家」への権威の委譲に由来する」にせよ、いずれの場合においても、それらの出現は「統治の秩序、主権の行使の秩序に先立つ「時代」に続く」[Lefort et Gauchet, op. cit., 12] ということである。契約論者のように、共同体の起源の前後を想定すること、「自然状態」と「社会状態」を対比すること、彼らはこれを可能としているものを、ルフォールの高校時代以来の師でもある M.メルロ＝ポ

ンティにならって、古典的哲学における「存在論的複視 *diplopie ontologique*」[*ibid.*] と呼び、批判する。さらにそこから、彼らは、メルロ＝ポンティの所謂「上空飛行的思考 *pensée de survol*」、すなわち社会の外部という「鳥瞰的視座 *surplomb*」を占有し得るといふ幻想[*ibid.*]、別言すれば「社会体への没入によってのみ見ることができるといふ幻想」[Tassin 2018: 64] を告発する。この幻想が「原初的なもの」の存在を覆い隠すものなのである。

以上のように、ルフォールとゴーシェは、社会の成立原理に関するマルクス主義的決定論も契約論も否定している。それらはともに、下部構造であれ社会契約であれ、社会の存立の起源を想定する過ちを犯している。むしろ、彼らは、社会を「原初的分割」、原初的なものの歪み、裂け目から出来する動的で異種混交的なものとして捉えようとしているのである。

では、彼らの原初的分割とは結局のところ何なのか。それは何を指すものなのだろうか。ルフォールとゴーシェの考える「原初的分割」とは、具体的に把握可能な実体的なものではない。つまりは、「把握し得ないもの *insaisissable*」[Lefort et Gauchet, *op. cit.*, 13] である。だが、彼らは諦念をもってそのように述べているのではない。むしろそれは、階級闘争や権力の審級の分割のような社会の事実 *fait* のうちに見出されるものであり、注目すべきことに、その基底に存する二つの欲望、すなわち、「支配したいという欲望と支配されたくないという欲望 *désir de dominer et désir de n'être pas dominé*」[*ibid.*, note. 6] への分割として理解し得るものなのである。

そして、彼らは、この原初的分割によって「社会的なもの」を根柢づけようとする。原初的分割は相互に「異他的な部分」へと社会的なものを分断するのではなく、「原初的分割を通じて、社会的なものは、相互に離れながら、それ自体と結びつき、その同一性 *identité* を得る」[*ibid.*, 13]。ここにカントの非社会的社交性やアレントの複数性概念との類似性を看取し得るだろうが、ともあれ、ルフォールとゴーシェは、「社会的なものは、それ自体の持続的な贈与 *donation* と制度 *institution*」[*ibid.*] と定義している。要するに、「社会的なもの」は、ア priori に存在するものではなく、その原初的分割によって不断に生み出され続けられるべきものなのである。

そこから、彼らの「新たな政治哲学」の構想にとって最も重要なことに、ルフォールとゴーシェは、原初的分割、その支配と反支配の欲望の相克によって生じる「社会的なもの」を、そして、その対抗的關係を顕現させたり隠蔽したりするものとして「政治的なもの」を捉え、それを民主主義理論の土台に据えるに至る。したがって彼らのいう民主主義とは、調和的なものでは決してあり得ず、むしろ、社

会的利害の対立、抗争 *conflict* から出来るもの、あるいはその運動それ自体を指す。そのような原初的に分割された社会、決してばらばらに解体され諸部分が相互に没交渉となるのではなく、二つの欲望によって互いに分離されつつ結合された人々の織り成す民主主義社会は、誰も「占有し得ない *inoccupable*」[*ibid.*, 17]。その占有不可能性が逆説的ながら「社会化のプロセスの構成要素」となるがゆえに、常に開かれ、したがって常に生成と消滅を繰り返す「社会的領域 *espace sociale*」[*ibid.*] がそこに現れるのである。そして、そこに宿るのが民主主義であり、その制度が民主主義体制である、と彼らは説いている。ルフォールとゴーシェは次のように述べている。「民主主義は政治の問題に専念し、社会的分割、イデオロギー、歴史によって開かれた問いを反省する」ものであるが、「民主主義は、それらの超克としての全体主義を宿している」[*ibid.*, 47]。要するに、彼らにとってそのような分割が乗り越えられ、消失していくことは決してないのである。そのような錯覚、幻想こそ全体主義を可能にしたものであった。

以上で、彼らの新たな政治哲学の企ての実相を考察してきた。要約しよう。ルフォールとゴーシェは、原初的分割を捉えること、あるいは政治の現れ方を規定するもの、その体制を民主主義的かそれとも全体主義的かを「決定」するようなものとしての「政治的なもの」を捉えることを主眼とした。彼らにとって、民主主義的社会は同質的なものでもなく、決定論的にも契約論的にも存立するものでもなかった。むしろ、階級闘争や権力闘争のような政治社会の既存の対立のなかに見出し得る、支配と反支配、不服従相互の戯れ、その分割された欲望によって生み出されるものであった。そのような「社会的なもの」が不断に生成され続ける政治社会の原理が民主主義であると彼らは理解したのであった。そして、その「社会的なもの」の否定のうえに生じたのが全体主義であると彼らは説いている。

Ⅲ. むすびにかえて—政治哲学の復権のあとで—

本稿が捉えようとしてきた、70年代を起点とするフランス型の政治哲学の復権の動きをどのように特徴づけることができるだろうか。

まず指摘し得ることは、ロールズやシュトラウスらの政治哲学の復権の潮流との著しい対照性であろう。ルフォールらの課題は、やはり政治社会の規範を確立することでもなければ、「善き社会」の構想でもなかった。「集合的なものの命運についての絶対知 *Savoir Absolu*」[*ibid.*, 18]¹⁰を彼らは峻拒している。ルフォールとゴーシェにとって重要だったのは、政治社会の現れの仕方、要するに「政治的なもの」を捉えることであった。彼らはそれを「原初的分割」概念によって理解した。

次に、より重要なことに、彼らはその「政治的なもの」を「社会的なもの」と結び付けて捉えていることである。つまり、権力闘争のみならず、階級闘争のような社会的利害をめぐる抗争をも「政治的なもの」の現れとして捉えて見せた。要するに、非政治的なものとして「社会的なもの」を閑却することは決してなかった。むしろ、B. シンガーが指摘しているとおおり、彼らが「政治的なものに言及しているとき、ほとんど必ず、社会的なものについて語っている」[Singer 2013: 186] のである。そのような「社会的なもの」と「政治的なもの」を独特の仕方ですべて articulate させ、民主主義論として打ち出したところに、その新しさがあったと言えるのではないだろうか。

要約すれば、彼らのいう「新しい政治哲学」の課題は、「政治的なもの」を考察することであり、より具体的には、「社会的なもの」を不断に「発見」していくこととなろう。社会に遍く無数に存在する「それ（社会的なもの—補足筆者）は根本的に、問いかけるようなもの interrogatif」[Lefort et Gauchet, op. cit., 18] である。彼らの「問い、それはその（権力システム—補足筆者）起源を社会的なものに位置付ける」[ibid., 8] ことに他ならなかった。この「対象に忠実な民主主義体制の理論」[ibid., 7] を彼らは以上のように構築しようとしたのであった。

このように本稿が追ってきた70年代に端を発する政治哲学の復権は、全体主義の反省に基づいて企てられたものであり、その「原初的分割」という全体主義への批判的なまなざしは、翻って「民主主義」論として、言い換えれば、その批判が同時に抵抗として、極めて重要な位置を占めることとなったと言えよう。

しかし、このようなルフォールの政治哲学は、いまだフランス語圏において、十分な研究がなされず、ルフォールの継承者として、その後、特に人権論をめぐって彼と決別し「通常政治 politique normale」[Gauchet 2005: 203] へと保守回帰したゴーシェのみならず、F. フェレ、P. ロザンバロンといった改良主義者や自由主義者のみを取り上げられ、逆に、ラディカル民主主義を要請するJ. ランシエール、M. アバンスール、E. バリバルらへの影響関係の看過が指摘されている点に鑑みれば [Lacroix et Fœssel 2019: 43]、原初的分割による民主主義論、さらにはその後の、方法論的个人主義に則らずむしろ、「社会関係を永続的進展の相において考えるために」人権を「社会権」[ibid., 47] の要請へと帰着させたルフォールのその「社会的なもの」の政治哲学は、新たに解釈される必要があるのだろう。しかしここでも注意が必要なのは、「人権」の擁護者ルフォールは、まさに同時期のB-H. レヴィやA. グリュックスマンらフランスの論壇を席捲した「新哲学派 nouveaux philosophes」の人権擁護の議論とは一線を画すという点である。レヴィらが人権を全体主義の到来を防ぐ道徳的基礎として擁護しようとしたのに対し [Moyn 2012: 293]、ルフォールは彼らの道徳主義と個人主義を批判し、むしろ人

権は「権利による対立 opposition de droit」[ルフォール前掲書: 29] を生みがゆえに、政治社会を構成するもの、その創造の場として捉えているのである [Lefort 1979: 42]¹¹。M. ルヴォ＝ダロンヌの言を借りれば、「新哲学派」らを「制度化されたもの l'institué の思想家」であったとすれば、ルフォールは「制度化する l'instituant 思想家」として区別しておく必要があるだろう [Balibar, Monod et Revault d'Allonnes 2019 :89]。

最後に、日本におけるルフォールの議論の意義について述べておきたい。しばらくの間、日本では「政治的なもの」をめぐる解釈が断続的にあらわされてきている [川崎 2010；森 2014]。また他方で「社会的なもの」への注目も近年強まってきており [市野川・宇城 2013；宇野 2016；齋藤 2016]、そのような「社会的なもの」と「政治的なもの」の関係もまた問われてきている [乙部 2018]。しかし、もし問いが択一的なものに陥るのであれば、その問題領域の重要性、すなわち貧困や格差にとどまらず、昂進する様々な社会問題の深刻化の度合いに鑑みずとも、やはり問題があろう。なぜなら、そのような「社会的なもの」の現れが、民主主義社会の存立の鍵を握るからである。この意味において、「政治的なもの」と「社会的なもの」が密接不可離の仕方で考察されたルフォールの政治哲学は新たな光を宿していると思われる。

注

- 1 「政治哲学の復権」のより包括的な研究は、[寺島1998]を参照。
- 2 この書は、1975年-1977年にかけて為されたインタビュー収録の文字おこしの集成である。ドゥオーキンとの対談もこの時期に行われたものである。マギーは「政治哲学の復権」がロールズに続いて、R. ノージック、そして、ドゥオーキンに引き継がれていると指摘している。
- 3 ここで宇野が念頭においているのは、ルノーやフェリーに加え、C. ルフォール、M. ゴーシェらであるが、彼らの政治哲学のエッセンスと影響関係に関しては、[宇野2019]を参照。本稿では、ここで宇野が述べるような「対英米リベラリズム」の陣営としてのフランス型の政治哲学の復権ではない、もうひとつの復権の動きに注目するが、とはいえ、宇野自身もこの復権の動きを本稿と同じく「全体主義」との対峙において生じたものと理解していることは付言しておきたい [宇野2011: 215]。
- 4 M.C. ベーレントは、アングロ・サクソン型のリベラリズムが消極的自由に専ら基づくものであるのに対し、「国家を解放の政治的手段」とみる積極的自由に依拠するものであると指摘している [Behrent 2016: 447]。ベーレントによれば、フレンチ・リベラリズムは革命以前よりの伝統を有するものであるが、近年の復権は、1978年刊のF. フュレ『フランス革命を考える』(岩波書店、1989年)を嚆矢とする [ibid., 449]。フレンチ・リベラリズムの伝統と発展に関しては、[Jaume 1997; Geenens and Rosenblatt 2012; Sawyer and Stewart 2016]を参照。
- 5 「戦後フランスの政治思想史」といえども、やはり一枚岩ではなく、いくつもの思想潮流が存在した。宇野によれば、その主たるものとしては、三つである。ひとつは、「左翼的な系譜を継ぐ」論者として、E. バリバル、J.L. ナンシー、A. ネグリら、いまひとつは、「ソルボンヌ系の「哲学教師」」として、フェリー、ルノーら、そして三つ目が「社会科学高等研究院 (EHESS)」のグループ、特に「レイモン・アロンセンター」を創設したフュレを筆頭に、C. カストリアディス、C. ルフォール、P. ロザンバロン、M. ゴーシェ、P. マナンらが挙げられる [宇野2019: 54-56]。
- 6 フランスにおけるシュトラウスやロールズの受容は80年代から90年代にかけて為された。例えば、シュトラウス『政治哲学とは何か』は1992年、ロールズ『正義論』は1987年にそれぞれ翻訳が為されている。ことロールズに限って言えば、好意的に受容されてきたとは言えないようである。B. マナンによれば、ロールズはノージックとハイエクとともに「新自由主義」の陣営に括られ理解されてきたからである。[Manin 1988]。いずれにせよ、本稿が焦点をあてる70年代に端を発するフランスにおける政治哲学の復権の動きに関していえば、シュトラウスやロールズの影響を認めることは難しい。
- 7 70年代のこの転回に関しては、[Christofferson 2004]に詳しい。
また、この文脈に照らしても興味深いのが、フランスにおけるアーレントの受容である。50年代におけるレイモン・アロンによるフランスへのアーレントの紹介にもかかわらず、長らくアーレントはフランスでは注目されないか、そうでなくとも誤解されてきた。しかし、70年代に入って、まさにこの「反全体主義的転回」と軌を一にするように、アーレントの受容も積極的に為されてきた。この点、フランスにおけるアーレントの受容は、フランスにおける政治哲学の復権の潮流に掉さすと言っても過言ではないであろう。この「フランスにおけるアーレントの受容史」については別稿を期したいが、その一端、とりわけアーレントへの「誤読 malentendu」に関しては、さしあたっては [Lindenberg 2009]を参照。また、日本では、現象学の観点からすでにフランスにおけるアーレントの受容が紹介されていることも付け加えておきたい [高橋1994]。
- 8 ここで、この無記名の巻頭の辞とルフォールの政治哲学の復権の企てを結び付けるのは曲解であると思われるかもしれない。しかし、それは次の事情に鑑み、牽強付会なものとは言えないと考える。ゴーシェの後年の述懐 [Gauchet 2003]によれば、ブリュッセル自由

大学のM. リシールやM. ルグロら、学生が中心となって、哲学、政治、文学など幅広く対象とするものとして1968年に創刊されたこの雑誌は、1970年ごろには行き詰まりを見せていたのだが、リシールがゴーシェに協力を要請し、そのゴーシェがルフォールを誘い、今度はルフォールがカストリアディスに声をかけ、といった仕方で、編集部がベルギー主体のものからフランス主体のものへと変わり、雑誌の性格も政治的なものへと傾斜することになった。そして、その一年ほどの休刊をはさんで、まさに満を持しての再出発となったのが、その1971年のその号なのである。そのときの彼らは、当時支配的であった毛沢東主義者ら「プロレタリア左派」には批判的ではありつつも、「極左」と自認しつつ、他方で、哲学の終焉を説く「ポスト構造主義化se poststructuralier」する当時の趨勢にも反旗を翻し、「状況を根本から解明する」ことを目指す「非常に理論的な」ものを目指していた。したがって、その雑誌は、「政治的社会的分析を根本的に捉え直すとともに、哲学的要請と関係を結び直すこと」[ibid., 200]として設定されたのであった。この点に鑑みれば、ルフォール自身がより明確に「政治哲学の復権」を謳うのが1983年の「民主主義の問題」[Lefort: 1983]であったとしても、この当時すでに、そのような「政治哲学」への強い志向性は準備されていたとみることができるのである。さらにいえば、この論文はルフォールのカーン大学での66-67年の講義をもとにして書かれているのであるが、最終的な推敲のことは措いておくとしても、そのエッセンス自体は、フランスにおけるいわゆる「ソルジェニーツィン・ショック」(1973年)にも、さらには68年の五月革命にも先駆けていることは注目されてもよいであろう。このようなルフォールの政治哲学の成立過程のより精緻な読解は今後の課題としたい。

- 9 C. ムーシャルによれば、この「原初的分割」は、同年1971年に仕上げられ、レイモン・アロンに提出された博士論文*Machiavel, le travail de l'œuvre*でも考察された、ルフォールの最も重要な概念である [Mouchard 2007: 23]。この博士論文は、翌年、*Le Travail de l'œuvre Machiavel*, (Paris: Gallimard, 1972)として出版されている。
- 10 ルフォールの弟子のひとりでもあるA. カイエは、ルフォールが、ロールズらアメリカの思想家の著作が「彼の手から落ちた」のは、「善き社会 *bonne société* のイメージ」にとらわれているからだ、と分析している [Caillé 1993: 62]。
- 11 これを公的空間における討議の場として捉える解釈は [平田2018] を参照。

〈参考文献〉

- Abensour, Miguel 1993 « Réflexion sur les deux interprétations du totalitarisme selon Claude Lefort », *Pour une philosophie politique critique*, Paris: Sens & Tonka, 2009
- 1994 « De quel retour s'agit-il ? », *Pour une philosophie politique critique*, Paris: Sens & Tonka, 2009
- Badiou, Alain 1998 *Abrégé de métapolitique*, Paris: Seuil
- Balibar, Étienne, Monod, Jean-Claude, et Revault d'Allonnes, Myriam 2019 « Le concept de totalitarisme est-il encore pertinent ? » *Esprit* 451, 83-98
- Behrent, M.C. 2016 "Liberal Dispositions: Recent Scholarship on French Liberalism" *Modern Intellectual History* 13 (2), 447-477
- Berthot, Franck 2007 « *Textures et Libre* (1971-1980). Une tentative de renouvellement de la philosophie politique en France », dir. François Hourmant et Jean Baudouin, *Les revues et la dynamique des ruptures*, Rennes: Presses universitaires de Rennes, 105-129.
- Caillé, Alain 1993 « Claude Lefort, les sciences sociales et la philosophie politique », dir. Claude Habib et Claude Mouchard, *La démocratie à l'œuvre. Autour de Claude Lefort*, Paris: Esprit
- Christofferson, Michael Scott 2004 *French Intellectuals against the Left: The Antitotalitarian Moment of the 1970s*, New York: Berghahn Books
- Corcuff, Philippe 2000, *Philosophie politique*, Paris: Nathan
- Gauchet, Marcel 2005 « De *Textures* au *Débat* ou la revue comme creuset de la vie intellectuelle », *La condition historique*, Paris: Folio.
- Geenens, Raf and Rosenblatt, Helena eds., 2012 *French Liberalism from Montesquieu to the Present Day*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Jaume, Lucien 1997 *L'Individu effacé ou le paradoxe du libéralisme français*, Paris: Fayard.
- Labelle, Gilles et Tanguay, Daniel 2003 « Le retour de la philosophie politique en France », *Politique et Sociétés* 22 (3), 3-7
- Lacroix, Justine et Foessel, Michaël 2019 « Pourquoi Lefort « compte ». Avant-propos » *Esprit* 451, 41-48
- Lefort, Claude 1958 « Organisation et parti », *Socialisme ou Barbarie*, 26, [repris dans *Elements d'une critique de la bureaucratie*, (Paris : Gallimard, 1979) 98-113]
- 1972 *Le Travail de l'œuvre Machiavel*, Paris : Gallimard
- 1979 « La communication démocratique: Entretien avec Claude Lefort » *Esprit* 33/34, 34-44
- 1983 « La question de la démocratie », *Essais sur le politique : XIXe-XXe siècles*, Paris: Seuil
- Lefort, Claude et Gauchet, Marcel 1971 « Sur la démocratie: le politique et l'institution du social », *Textures*, 213, 7-78
- Lilla, Mark 1994 "The legitimacy of the Liberal Age", ed. Mark Lilla, *New French Thought: Political Philosophy*, Princeton: Princeton University Press.
- Lindenberg, Daniel 2009 *Le Procès des Lumières. Essai sur la mondialisation des idées*, Paris: Seuil
- Manin, Bernard 1998 « Tristesse de la social-démocratie ? La réception de John Rawls en France », *Esprit*, 136/137
- Mouchard, Claude 2007 « Siècle ouvert », Claude Lefort., *Le temps présent. Écrits 1945-2005*, Paris: Belin
- Moyn, Samuel 2012 "The politics of individual rights: Marcel Gauchet and Claude Lefort", Raf Geenens and Helena Rosenblatt eds., *French Liberalism from Montesquieu to the*

- Present Day*, Cambridge: Cambridge University Press
- Non signé, 1971 « Éditorial », *Textures*, 2/3
- Pogge, Thomas 2007 *John Rawls: His Life and Theory of Justice*, trans. Michelle Kosch, New York: Oxford University Press.
- Poirier, Nicolas 2011 *L'ontologie politique de Cornelius Castoriadis. Création et Institution*, Paris: Payot
- Rancière Jacques, 1990 *Aux bords du politique*, Paris : Osiris
- 1995 *La mésentente. Politique et philosophie*, Paris, Galilée [松葉祥一・大森秀臣・藤江成夫訳 『不和あるいは了解なき了解—政治の哲学は可能か』 (インスクリプト、2005)]
- Rosenblum, Noah 2016 “Rethinking the French Liberal Moment: Some Thoughts on the Heterogeneous Origins of Lefort and Gauchet’s Social Philosophy” Sawyer, Stephen W. and Stewart, Iain eds., *In Search of the Liberal Moment: Democracy, Anti-totalitarianism, and Intellectual Politics in France since 1950*, New York: Palgrave Macmillan
- Sawyer, Stephen W. and Stewart Iain eds., 2016 *In Search of the Liberal Moment: Democracy, Anti-totalitarianism, and Intellectual Politics in France since 1950*, New York: Palgrave Macmillan
- Singer, Brian C. J. 2013 “Democracy beyond the Political: Reconsidering the Social”, ed. Martin Plot, *Claude Lefort. Thinker of the Political*, New York: Palgrave Macmillan
- 市野川容孝・宇城輝人編 2013 『社会的なもののために』 ナカニシヤ出版
- 宇野重規 2003 「フランスでの政治哲学の復権をどう捉えるべきか」『創文』(1/2)
- 2011 「再帰性とデモクラシー—もう一つの起源」[宇野重規・田村哲樹・山崎望『デモクラシーの擁護』(ナカニシヤ出版、2011)]
- 2016 『政治哲学的考察—リベラルとソーシャルの間』 岩波書店
- 2019 『増補新装版：政治哲学へ—現代フランスとの対話』 東京大学出版会
- 乙部延剛 2018 「〈政治的なもの〉から〈社会的なもの〉へ?—〈政治的なもの〉の政治理論に何が可能か」松本卓也・山本圭編『〈つながり〉の現代思想—社会的紐帯をめぐる哲学・政治・精神分析』 明石書店
- 川崎修 2010 『「政治的なもの」の行方』 岩波書店
- 齋藤純一 2017 『不平等を考える』 ちくま新書
- シュトラウス, レオ 2014 飯島昇藏・石崎嘉彦・近藤和貴・中金聡・西永亮・高田宏史訳『政治哲学とは何であるのかとその他の諸研究』 早稲田大学出版部
- 高橋哲哉 1994 「ハンナ・アーレントと現象学—フランスの一動向—」、『現象学年報』10, 105-115
- 平田周 2018 「クロード・ルフォールにおける民主主義と自由主義の接合関係をめぐって」南山大学紀要『アカデミア』16, 141—153
- 藤原保信 2007 『政治哲学の復権』 新評論
- マギー, ブライアン 1983 磯野友彦訳『哲学の現在』 河出書房新社
- 森政稔 2014 『〈政治的なもの〉の遍歴と帰結—新自由主義以後の「政治理論」のために』 青土社
- ルフォール, クロード 2017 渡名喜庸哲・太田悠介・平田周・赤羽悠訳『民主主義の発明』 勁草書房
- ロールズ, ジョン 2010 川本隆史・福岡聡・神島裕子訳『正義論』 紀伊國屋書店

Abstract

Another Moment of the Recovery of the Political Philosophy in France

:From a Perspective of C. Lefort's Turn in 1970s

What does “recovery of the political philosophy” mean for us today? It has been understood as an “American” movement of political philosophy stimulated by Leo Strauss or John Rawls. The former, after the end of the 1950s, tried to restore the knowledge of “good life and good society” by criticizing relativism. The latter started to challenge utilitarianism by arguing for the concept of justice from the 1970s. Both conceived a political philosophy as normative theory that is based on liberalism.

At the same time in France, however, there was another movement of “recovery of the political philosophy.” We can trace it back to an intellectual group that came together on a journal, *Textures* (1968–1975). Indeed, in the issue “*Du politique (On the political)*” (1971), which declared to “lay the foundation of a new political philosophy,” Claude Lefort and Marcel Gauchet cowrote a long and esoteric, but very ambitious, article “*Sur la démocratie: le politique et l’institution du social (On democracy: the political and the institution of the social)*.”

In the article, Lefort and Gauchet argue that we should note the significance of “original division,” i.e. desire to dominate and not to be dominated. According to them, these two opposite desires separate us and, at the same time, link us. Furthermore, it is only by this division that a society comes into being. They call it “the social,” which has never existed *a priori*. According to them, “the social” can be conceived as a movement in itself. In other words, “the social” only exists as long as it is possible for people’s various conflicts to take place. They think that only democracy makes it possible. In this regard, one could say that their concept of democracy is “institution of the social.”

From this point of view, Lefort and Gauchet criticize two grand and classical theories. First, they think that Marxism crystalized in totalitarianism is nothing but determinism, and therefore, it denied and destroyed “original division” to

call for a classless society. Second, they question the philosophy of “social contract” emphasizing the origin of community. According to them, it supposes an existence of “before” and “after” of community, i.e. “natural state” and “social state,” by which “original division” of the people is covered.

In short, Lefort and Gauchet think that democracy must be based on “the social,” i.e. various conflicts among people. If “the social” disappears, i.e. if people regard their society as harmonious or one that has no conflict, they argue, democracy disappears.

The article concludes with the remark that the French version of “the restoration of political philosophy” since the 1970s should not be considered as that of normative theory or liberalism. The article sheds light on another task of the new political philosophy of French thinkers Lefort and Gauchet, who reflected “the political” to stay in sight of “the social,” not only from the perspective of politics but also from that of political philosophy.

